

Title	ことばを超えたコミュニケーション
Author(s)	山根, 寛
Citation	京都大学医療技術短期大学部紀要. 別冊, 健康人間学 (1998), 10: 2-9
Issue Date	1998
URL	http://hdl.handle.net/2433/49554
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ことばを超えたコミュニケーション

山 根 寛

Communication Beyond the Boundaries of Language

Hiroshi YAMANE

Abstract: When we try to communicate with people who has mental disorders such as dementia, schizophrenia, and so on, often the language does not work as a means of communicating, because of the disease condition. The purpose of this study is to examine the process and condition that the language begin to work as a means of communication, and to show the techniques of using non-verbal media in communicating with people who lost their language as a message sign. In occupational therapy, we mainly use the following non-verbal media: (1) paralanguage (nonverbal factor in talking), (2) body language (expression on action and behavior), and (3) objects (one's possession, works and tools). Our techniques of using these media follow.

1. Observing how to react on stimuli
2. Using the common point of five senses and experiences
3. Catching one's nonverbal expressions
4. Using one's basic data experienced and kept by the five senses in one's life
5. Accepting own feelings and adjusting attitude
6. Giving language as if objects
7. Communicating through treating objects

Key words: Communication, Mental disorders, Non-verbal media, Occupational therapy

はじめに

重度のアルツハイマーと診断された富代さん(仮名)は、もうことばがそのままの意味をもって伝わらなくなっていた。同居する息子の名前もずいぶん前からわからなくなり、朝御飯を食べたことすら忘れてしまうようになっていた。そんな富代さんとある年の始め、初詣に行った。どこに行くのか、何が起きるのか、いつもと違う風景に、富代さんは一緒に歩く介護の人の手を色が変わるほど握りしめていた。お

宮についてお賽銭をあげても、不安そうに人混みを眺め、自分がまだ何をしているのかよく分からないようだった。一緒にお参りしようと鈴のひもを引き、ガランガランと鈴の音がしたとき、はっとしたように「お参り、お参り、お宮さん」と言ってうれしそうに笑い始めた。鈴の音が記憶の底に沈んでいた思い出をよみがえらせたのだろうか。帰り道、富代さんは「お参り、お参り」とにこにこして歩いて帰った。

ことばはコミュニケーションの重要な役割を果たす道具であるが、精神科領域の作業療法の

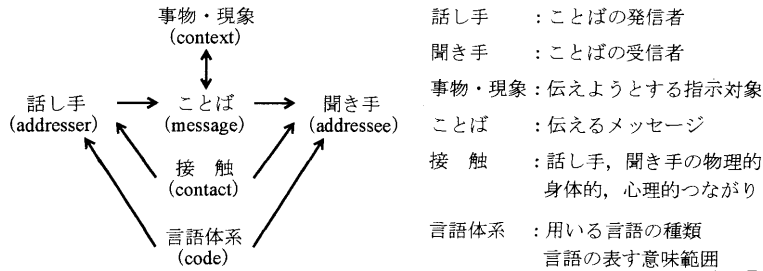


図1 言語活動が成立する基本的要素

対象となる人たちの多くは、意味記号としてのことばが本来のコミュニケーションの機能を失った、もしくは何らかの理由で果たさなくなっている状態にある人たちといってもよい。そうした人たちと、どのようにコミュニケーションをはかるか、それは作業療法に限らず、リハビリテーションの関わりにおける基本的な課題である。

ことばが十分にその意味記号としての機能を果たさない対象や、一度身につけたことばがその機能を失った対象との関わりにおいて、コミュニケーションの成立に五感の共通性が大きな役割を果たす。コミュニケーションの成立条件やプロセスを振り返り、ことばの記号的意味に頼らないコミュニケーションについて考えてみることにする。

ことばとコミュニケーション

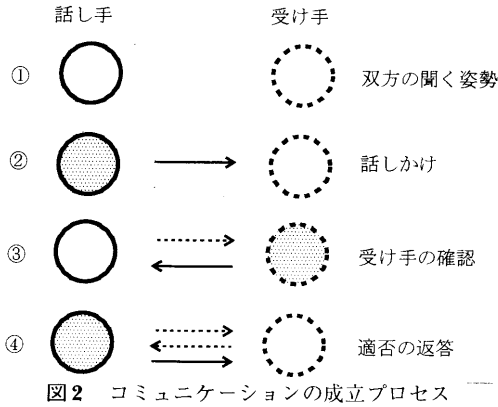
私たちが知覚したり経験していること、人間の意志や営みとは関係のない自然現象、いずれも境界のない連続したものであるが、ことばはその連続したものをあるまとまり（意味範囲）ごとに区切る記号といえよう^{1,2)}。人が感情、意志、考えなどを伝え合うために用いる意味記号としてのことばは、社会的默契と称されるように、ある社会（集団）における社会的慣習である²⁾。その意味を表す記号としてのことばが、お互いの気持ちや考えを伝えあうコミュニケーションの道具としての機能を果たすには、いくつかの条件がある。

Roman Jakobson は、言語行動が成立するための基本的な要素として、話し手 addresser,

- 話し手 : ことばの発信者
- 聞き手 : ことばの受信者
- 事物・現象 : 伝えようとする指示対象
- ことば : 伝えるメッセージ
- 接触 : 話し手, 聞き手の物理的・身体的, 心理的つながり
- 言語体系 : 用いる言語の種類
言語の表す意味範囲

聞き手 addressee, 事物・事象 context, ことば message, 接触 contact, 言語（記号）体系 code をあげている³⁾⁴⁾。話す人 addresser と聞く人 addressee がいて、伝えようとする事物・対象 context と伝えることば message, これらが言語行動の成立に必要な要素であることは自明なことであろう。そして、音声としてのことばを用いる場合、音が伝わる物理的脈路と聴覚や発語機能など身体的に大きな障害がないこと、さらに話し手と聞き手がお互いにコミュニケーションをはかろうとする姿勢がなければコミュニケーションは成立しない。この物理的、身体的、心理的要素が接触 contact といわれるものにあたる。最後に、用いている言語が同じであること、もしくは翻訳（通訳）などで間接的に記号としての言語を同じものにする。お互いの使用していることばの表す意味範囲に大きな違いがないことが必要である。それが言語体系 code にあたる。鈴木⁴⁾の図を参照にそれらの関係を示すと図1のようになる。そうした条件がそろって、交わされることばがお互いの気持ちや考えを伝える機能を果たす。

しかし、こうした条件が満たされた状況においても、同じことばを話しているのにお互いの言いたいことが伝わらないという経験は誰にでもある。意味記号としてのことばによるコミュニケーションが成立するには、①相手の話を聞く姿勢にある二人の一方から、②相手に話しかける、③聞いた人がこういうことですねと確認のフィードバックをする、④話し手からそれに対する適否が示される、という②から④の最低1往復半のやりとりが必要である（図2）。同



じ言語を話しながらコミュニケーションが成立しないという場合の多くは、お互いの用いていることばが同じ意味を表していないか、図2のプロセスが満たされていない場合といえよう。

発達プロセスとコミュニケーション

ことばが意味記号として機能するようになるプロセスを人間の発達プロセスとコミュニケーションの関係からみることにする。

1. 誕生前の胎内

誕生前、人は母親の胎内で暖かい羊水に浮かび、へその緒で母体とつながり、自他の未分化な時期をすごす。そのときからすでに母親の心音などの体内音、リズム、温度といったものが、もっともプリミティブなコミュニケーションの共通情報として、私たちの深い記憶の底に蓄積される。

眠りにつく前の乳児が現実から非現実への移行の狭間でむずがっているとき、成人にとってはただの雑音にしか聞こえない胎内で聞こえる心音のテープを聞かせると、静かに眠り始める。誕生前の絶対的な依存環境である胎内の穏やかで安定した環境と関連して、なじみの感覚

として乳児に安心感を与えるためと考えられる。

2. 誕生後の自己以外の世界との関わり

誕生後、まるですべてを口で確認するかのようになり、乳児は何でもなめたりかじったりする。自他の未分化な胎内環境から胎外にでた乳児は、口唇、舌、口腔粘膜の味覚や触覚受容器を通して自己以外の世界を取り入れる。こうして得られた情報から、次第に自己内外の区別が自覚されるようになる。それは社会的関係の始まりともいえる。そして運動機能や神経系の発達に伴って、味わい、嗅ぎ、触り、聞き、見るといった五感を通じた具体的な身体感覚情報の入力が増える。

3. 直接情報からイメージ情報へ

身体感覚を通じた基礎情報は、生命に直接関係が深い味覚や嗅覚といった近感覚（劣等感覚ともいわれる）に始まる（図3）。なめたりかじったりすることで口唇、舌、口腔粘膜、鼻腔粘膜を介した味覚、嗅覚レベルの情報は、さわることによる触覚レベルの情報と共に直接情報として蓄積され、知覚や認知のための基礎情報となる。やがてその基礎情報が視覚情報と結びつくことで、見る（視覚情報）だけで目にしたものがどのような味わいや手触りなのかといった身体的感覚がイメージとして再現されるようになる。そうして、ことばによってこれらの基礎情報が整理されるようになると、概念、イメージとして、ことばを媒介としたコミュニケーションが可能になる。

直接情報がイメージ情報になる課程を、梅干しやレモンを例に考えてみると（図4）、まず初めて梅干しやレモンをかじって、酸っぱいという体験をする。この味覚（身体感覚）による直接情報が記憶される。この直接情報を基礎情

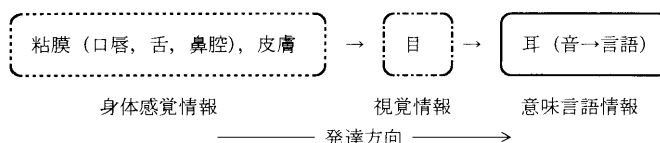


図3 情報入手器官と情報の種類

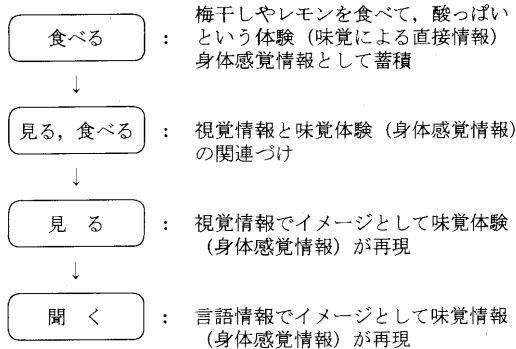


図4 直接情報がイメージ情報となるプロセス

報として、梅干しやレモンを食べるとき視覚情報と味覚情報が関連づけられ、次第にそのものを見ただけで、視覚を通して酸っぱいという感覚がイメージとして再現されるようになる。さらに梅干しやレモンという具体的なもの（事物や対象）、酸っぱいということ（性質や関係性など）がことばによって分節されることで、共通の体験をもつ者同士の間では、梅干しやレモンの話をするだけで、酸っぱいという感覚が双方に再現され、イメージによる類似体験が成り立つ。

4. コミュニケーションの基盤としての身体感覚

このように私たちのコミュニケーションの基盤は、感覚受容器官としての五官とそれによって感受される五感の、人としての生理的な共通性をベースに成り立っている。このことは、ことばがその機能を失っても、ことばで分節される元にある身体感覚レベルの共通性を生かすことで意味記号としてのことばに頼らないコミュニケーションの可能性を示唆している。

ことばを超えたコミュニケーションの媒体

意味記号としてのことば以外のコミュニケーション（非言語コミュニケーション nonverbal communication）の媒体について整理する（表1）。

〔音声（周辺言語）〕

幼児がことばの意味よりも、母親の声のかけ方で安心したり不機嫌になったりするように、

表1 ことばを超えたコミュニケーションの媒体

音 声 (周辺言語)	大小、強弱、高低、速さと変化 間合い、テンポと変化 リズムや抑揚 ことばの量 ことばの調子
身 体	目、視線、アイコンタクト 表情 姿勢、身振り、動作 行為（と結果）、行動 外観
モノ	所有物（購入した物、もらった物など） 作品（自分で作った物） 使用物（道具、材料、物品など）

文字にすると同じでも、話し方によって伝わり方はずいぶん違う。周辺言語 paralinguage といわれることばの音声の部分による非言語コミュニケーションといえる。ことばの記号としての意味以外の非言語コミュニケーション要素には、声の大きさと変化、声の強さと変化、話し方の間合い、話すテンポと変化、話すリズムや抑揚、話されることばの量、ことばの調子、といったものがある。ことばの非言語的な要素は、大きな強い声で人が口を挟む間もないほどまくし立てるとか、低く押さえた口調でゆっくりとかんで含めるように話すといったように、いくつかの要素が重なって、話し手の気持ちを言外に表す。

〔身体〕

見交わしている瞳を見て、ああこの二人は友達から恋する関係になったのだとわかる。なぜ分かるのだろうか。直接ことばを交わして話しているのに、「電話じゃ何だから、会って話そうよ」ということがある。何が違うのだろうか。ことばの意味、声の非言語的な意味だけでなく、人の表情や身振りなどから、語られていない人の気持ちが伝わり、また私たち自身が十分意識していないが、それを知らうとしているからであろう。

ことばが、知覚、認知のプロセスにおいて知

的フィルターのチェックによる知的防衛の影響を受けやすいのに対し、視線やアイコンタクト、表情、姿勢、身振り、動作といった身体的に表現されるものは、知的防衛を越えてありのままが出されやすい。

昨日と同じテーブルにすわって編み物の続きをしている。何かが違う。編み棒の動きが昨日までに比べて何となく遅いだけでなく、何か変だ。何か気になることでもあるのだろうか。声をかけてみると、昨日の面会で、家族がまだ少し早いと退院にいい返事をしなかったという。身振りや動作はその人の癖であることも多いが、一連の行為の変化には人の心の動きが現れる。

作業活動を共にする作業療法の関わりにおいては、対象者の活動の様子（行為）やその変化などから、その人の特性や気持ちを押し量り、働きかける。

[モノ]

買った品物、自分が作った物、自分が使っている物、それらがどのように扱われるかは、自分がどのように扱われるかと同じ意味を持つ。モノは人に所有されたときから、その人の一部になったり、その人を象徴する意味を持つようになるためである。

ことばがコミュニケーションの
機能を果たさないときは

作業療法の関わりで経験されることばが意味記号としてのコミュニケーションの機能を十分果たさない対象や状態の主なものを表2に示す。

[未発達、遅れ]

ことばそのものがまだ未発達な乳幼児やこと

表2 ことばが機能を果たさない対象や状態

未発達、遅れ	〔	ことばの未発達な乳幼児 ことばの発達に遅れがある
心理的問題	〔	抑圧、抑制など心理的防衛 相手を疑っているときなど
意味の変質	—	ことばに別な意味が組み込まれ始めたとき
機能障害	—	理解や認知の機能に障害が 起き始めたとき

ばに発達上の遅れのある場合、多くは見交わしたり、微笑みあったりする母子の関わりに見られるような視線や微笑の共有、行動のやりとりなどによってコミュニケーションが図られている⁵⁾。

児童に対するプレイセラピーは、次に述べる情緒的問題を含め、通常の言語を媒介とした心理療法では困難な対象に対して、ことばの機能を補う遊びという行動のやりとりを生かしたものと見える。

[心理的問題]

ことばそのものの基本的な発達に大きな問題はない場合でも、話し手と受け手の間の情緒的問題、信頼の有無などにより話し手が相手を疑っていたり、抑圧などの心理的な防衛により本人自身も自分の本当の気持ちに気がついていない場合には、言葉は意味としてのコミュニケーションの機能を果たさない。

そうした対象に対する治療的関わりにおいては、ことばそのものの直接的な意味より、表現されたことばや行為を象徴として推察することでその背景を理解したり、芸術療法や精神分析的作業療法の手法にみられるように、知的フィルターを介することが少ない創作的な作業活動をことばに変わる媒体としている。

[意味の変質]

精神分裂病などで病状の経過において、ことばによる世界の秩序が崩壊したような状態がみられる⁶⁾。ことばが通常の意味を失い、別な意味づけがなされたり、ことばのサラダといわれるように統合された意味を失った空疎なことばの過多状態がみられたり、反対にまるでことばを捨てさったかのように言語の表出が見られなくなったりする。

そのような場合、相手の話すことばの世界にはいることでコミュニケーションを図ったり⁷⁾、行為のやりとりやモノを通したコミュニケーション手法がとられる。

[機能障害]

痴呆にみられるように、一度は獲得された意味記号としてのことばも、言語による理解や認

表3 ノンバーバルコミュニケーションのコツ

- 刺激に対する反応を観る
- 五感の共通性、共有体験を生かす
- 相手の非言語情報を聴きとる
- その人の生活史の中で蓄えられた情報を生かす
- 自分に生まれる構えを整える
- ことばをモノとして手渡す
- モノの扱いを通して気持ちを伝える

知の機能に障害が起き始めたときには、その役割を果たさなくなる。そして障害が重くなるほど、意味よりも周辺言語としての声に対する感覚的やりとりがコミュニケーションの中心となってくる。

もちろん痴呆のような不可逆性の機能障害だけでなく、一時的な意識の混濁においてもみられる。

ことばを超えたコミュニケーション

ことばが意味記号として十分な機能を果たさない場合に、どのようにコミュニケーションをはかるか、作業療法の間から得られたいくつかの知見をまとめる(表3)。

1. 刺激に対する反応を観る

コミュニケーションをはかる上で最初に大切なことは、対象者が環境からの刺激に対してどのような反応をしているかを観察することである。入力される感覚が意識されているか、意識されないうまま反射的に反応していないか、主にどのような刺激に反応しているか、避けているのか受け入れているのか、といったことである。そうした外部刺激に対する感覚、知覚、認知のプロセスにおける反応のありようにあわせて、働きかけの方法を決めることになる。

2. 五感の共通性、共有体験を生かす

どのように知覚され認知されるかはその個人の生活史における経験による違いはあるが、外部刺激を感知する人の五官や感知された五感はある人としての生理的レベルではほぼ共通している。私たちが使うことばはメタファーなしには使いものにならないが、感性的メタファーはすべて私たちの身体的感覚と知覚に基づいてい

る⁸⁾。

寡黙で自閉がちな人と一緒に園芸をする。種をまき、芽が出て育っていく畑の野菜をみてみると、緑の葉の動きで風がみえる。互いに顔を見合わせてうなずく。春の川原を共に歩く。病いの苦しみの中にあっても、春の日の暖かさ、まぶしさは、その中にある者に共通に感じられる事実である。そこには土や水、空気、植物という自然な環境に、身体感覚を通してふれる一体感がある。そのときの気持ちのありようの影響もあるが、人の身体感覚(五官によって感受される五感)の生理的な共通性と、共に活動を体験した共有体験に支えられた一体感である^{9,10)}。春の陽の「あたたかい」、「まぶしい」という感じを、ことばだけで伝達することはできないが、共に陽を浴びて「あたたかいね」、「まぶしいね」というとき、初めてことばは知識体験の総体として共有する意味を持つ¹¹⁾。この五感の共通性とそれを基盤とした共有体験を生かすコミュニケーションは、作業療法士が対象者の気持ちを感じとり、また対象者に自分の気持ちを伝えるとき、ことばを超えた助け(メタコミュニケーションに類する)となる。

3. 相手の非言語情報を聴きとる

表1に示した声(周辺言語)、身体、モノなどが示すものは、意識的であるが故に防衛的になりやすい言語に比べ、無意識的な人の本当の気持ちが現れやすい。非言語情報は、受け取る人の主観的な判断によるため、言語に比べれば的確さ客観性に欠けるが、意味記号としてのことばを補う、時にはことばを超えた情報となる。

4. 生活史の中で蓄えられた情報を生かす

本稿のはじめにエピソードとしてあげた富代さんのように、重度の痴呆を伴いことばが意味を伝える道具としての機能を失い、音としての声に対する感覚レベルの反応しかみられなくなった人の場合でも、生活史の中で具体的な体験を通して蓄えられた情報が関わりの手がかりとなることが多い。富代さんにとって鈴の音が生活史の中で何らかの意味を持って体験とつな

がりがあったことがうかがえるように、個人にとって意味あるもの、個人のライフサイクルを形成してきたものは、記憶の奥底に埋もれていたパターンとして認識¹²⁾されていたものと呼ば覚ましたり、感覚、知覚レベルで人に反応を引き起こす。自殺未遂で全健忘となった分裂病の青年が、幼い頃から母に指導されたピアノををきっかけにその記憶を取り戻す課程を共に過ごした経験がある¹³⁾。

5. 自分に生まれる構えを整える

実質のない長引いた会議でうんざりしてイライラしていた日、そのままの気持ちを引きづったまま作業療法のグループに参加したときのことだ。いつも口数の少ない分裂病の参加者に「何か怒ってますか、すみません」といわれた。作業療法士に成り立ての頃何度か経験したことである。疲れているのでできればこの面接はしたくないと思っていると、そうした自分の気持ちを押しさえていても相手に何となく伝わってしまうということもよくある。

現していないつもりでも、表情や姿勢、身体の動きにそのときの感情や本音の気持ちが現れるためである。ことばが意味記号としての役割を十分果たさない状態にある対象者は、感覚・知覚レベルで反応するため、コミュニケーションを図ろうとする私たちのノンバーバルな要素に、普通以上に反応しやすい。私たちが与えているであろう刺激について配慮が必要になる。

こうした場合には、自分の感情を抑えるよりも、怒りや疲れなども含んで自分の感情をそのまま認めてしまう方がよい。そのうえで、疲れているけどこのグループが、この面接が終わったら休憩にしよう、我ながらよくやっているよと自分にいって臨むとよい。自分の感情を受け入れて予定を立てることで、イメージによる運動企画により身体に現れる構えが整えられるためである。

6. ことばをモノとして手渡す

ことばの音声の部分を生かしてコミュニケーションをはかるとき、ことばを音としてではなくモノを手渡すようにイメージするとよい。具

体的なモノとして渡そうとすることで、①お互いが視覚的に確認できる位置を取る、②アイコンタクトが確実になされる、③相手が受け取る能力に合わせてことばの量や話す速さを配慮する、④受け取る準備ができたか確認して話す、⑤受け取ったことを確認して次のことばを渡す、といった基本的なことがなされ、図2のプロセスを満たすことになる。

簡単なイメージを用いた方法であるが、前述した構えという面からも、上手に話そうと意識から生まれる緊張が減少し、対象者にも安心とゆとりを与える。

7. モノの扱いを通して気持ちを伝える

対象者が所有しているモノ、作品、使用しているモノは、程度の差こそあれその人の自我の拡張といってよい。そのモノをその人に対処するのと同じ気持ちで扱う、またその人に対して伝えたい気持ちやことばを、器具や材料、作品の受け渡しでおこなうようにする。作業療法の課程で、ことばによるコミュニケーションが困難な場合や治療関係が十分成立していない時期においては、モノを介した関わりが、ことばのかわりにこちらの気持ちを伝えたり、関わる者の行為を具現化する。

おわりに

ことばは情緒的、知的コミュニケーションを成り立たせる優れた媒体であるが、そのことばの働きが十分機能しない領域において、非言語的な治療媒体を用いて関わる方法について、作業療法の臨床から得られたいくつかの知見を述べた。

非言語的な媒体はことばの領域を超えたコミュニケーションの媒体であるが、それは身体的(感覚的)・情緒的な世界であり、その域を超えることはない。パラドキシカルに聞こえるが、ことばが身体的(感覚的)・情緒的なレベルを含んで共通の意味を取り戻すとき、本当のコミュニケーションが成り立つ。

文 献

- 1) 丸山圭三郎：言葉とは何か。東京：夏目書房，1994：1-205
- 2) 鈴木孝夫：記号としてのことば，教養としての言語学。東京：岩波書店，1996：2-63
- 3) R. Jakobson：Framework of language（池上嘉彦・山中桂一訳：言語とメタ言語。東京：勁草書房，1984：101-117）1980
- 4) 鈴木孝夫：ことばの働きとあいさつ，教養としての言語学。東京：岩波書店，1996：64-100
- 5) 岡本夏木：子供とことば。東京：岩波書店，1982：1-202
- 6) 飯森真喜雄，内田 訓：分裂病のことばの取り扱い，言葉と精神療法。現代のエスプリ 1989：264：145-157
- 7) 妙木浩之：キーワードとメタファーの発見と使用，言葉と精神療法。現代のエスプリ 1989：264：177-189
- 8) 瀬戸賢一：メタファー思考—意味と認識の仕組み—。東京：講談社，1995：1-210
- 9) 山根 寛：作業療法と園芸—現象学的作業分析—。作業療法 1995：14：17-23
- 10) 山根 寛：精神障害と作業療法。東京：三輪書店，1997：65-75
- 11) 鈴木孝夫：ことばと文化。東京：岩波書店，1973：1-209
- 12) 渡辺 慧：認識とパターン。東京：岩波書店，1978：1-191
- 13) 山根 寛：記憶を取り戻したピアノの役割—作業活動に関する仮説とピアノの機能—。音楽療法 1992：2：97-106
- 14) 山根 寛：作業療法における物の利用—術後歩行困難となった接枝分裂病患者—。作業療法 1992：11：274-281